

ハイスクールD×D～終
末世界のJUDAS～

シュレディンガーの熊

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

この世界には神話、逸話、伝説が数多く語られている。

その中のひとつ、聖書の物語を語るとしよう。

『一人の神が世界を創造し、人間を生み出した。神が生み出した最古の人間は、とある楽園で平和に暮らしていた。しかし人間は一匹の蛇に唆され、今いる大地に追放されてしまった。』そんなお話。

以後人々はその場所を永遠の理想郷と言うようになり、生涯を掛けて探す人が後を絶たなかった。

だが誰一人として、その場にたどり着いたものはいない。

それでも幾千年もの間、今もどこかにあると、人々に語り継がれている。

誰もが求むその場所の名は——樂園《エデン》。

「なあ、人は死んだらどこに行く．．．？」

石踏先生のハイスクールD×Dと、水無月先生のJUDASのクロス！

シユレディンガーの熊、四作目にして初のクロス作品です

目次

プロローグ	1
第一話・・・搜索	10
第二話・・・男の娘	23
第三話・・・神父	33
第四話・・・予期	41

プロローグ

人間達が何気なく暮らすこの世界には、人間とは違う種族が存在している

人間に崇められ、神の祝福を与える——天使

人間に囁き、欲望を叶える——悪魔

人間を羨み、共に快楽に興じる——堕天使

彼等は時に救いを与え、時に破滅に導き、時に分かち合い、人々と関わっていた

その他にも、妖精や精霊、妖怪といった種族等、数多くの存在が人間達の生活の裏で存在している

異なる種族達は裏で隠れながらも、中には人間に関わったり人間の世界に溶け込んで
いる者もいる

その存在はもしかしたら、あなたの身近にいるのかもしれない・・・

オツス、俺兵藤一誠

我らが学園の御姉様にしてオカルト研究部の部長、その実は悪魔の名家グレモリー家の次期当主リアス・グレモリー様の下僕悪魔です

ひよんなことから墮天使に殺された俺は、リアス様の下僕として悪魔に転生してもらった

命がけの戦いあり、素晴らし・・・いや、けしからんエロ展開あり、たわわなおっぱいもかわいいいちっぱいもありまくりの青春悪魔ライフを満喫中です！

.....

だんだん夏も終わって涼しくなってきた秋の夜、いつものようにぐつすとベッドで寝ていると

「イツセー。私の処女をもらって頂戴」

「ふ、ふ、ふ部長!」

丸裸の部長に押し倒されていた

なんか前にもこんなことがあったような・・・

そうだ、ライザー・・・あの焼き鳥野郎との婚約騒ぎの前の日もこんな感じだった

「部長、一体どうしたんですか?もしかしてまたライザーの奴が来たんですか?」

押し倒された状態のまま、俺は部長に聞いてみた

もしそうならもう一度俺がぶちのめしてやろう!部長を二度も泣かせるあの焼き鳥は思いつきりぶん殴る!

いやそれとも別の悪魔だろうか?あれから部長の婚約者という話は聞いたことがないが、また新しい婚約者が現れて、部長にひどいことをしたのかもしれない。たとえばうでも俺はそいつをぶん殴ってやる!

ふにゅん

突然、左手が何かに触れた

・・・この余りある大きさ、張りのある弾力、鷲掴みがあるこの感触。こ、これは・・・

答えは・・・ハイ!部長のおっぱいです!

・・・いやいや!なんで部長のおっぱいが俺の左手にあるのですか!?

ふとよく見ると俺の左手首が部長につかまれていた

ぶ、部長？今日のスキンシップはずいぶんとあれですね・・・

落ち着け落ち着くんだ兵藤一誠。間違いがあつてはならない

それに、俺の横にはアーシアが寝ている。もし、アーシアがもしここで目覚めようものなら・・・

『わ、私も混ぜてください！私もイツセイさんと・・・』

『アーシア!?』

『そう、なら三人で・・・』

『三人でつて・・・俺にそんなこと・・・!』

『イツセイ・・・』 『イツセイさん・・・』

『う、ああ・・・』

いや、なぜ俺が襲われているんだよ!

・・・だがまあ、それはそれで・・・タラー

——ハッ!イカンイカン!流されるな男兵藤一誠!

最近アーシアに対する気持ちも変わってきたせいかな普通にこんな妄想が出てしまう

!

いつの間にか鼻から出た赤い液体を手でぬぐう

「ねえイツセー、私の事が嫌いななの？」

部長が寂しそうな顔で問いかける

「そんなことありません！」

俺は力強く否定した。こればかりは言わずにいられなかった

「だって俺は、あの時から、ずっと部長の事が……！」

「じゃあ……来て、イツセー……」

腕を広げて部長が待ちかまえた

い、いつちやって良いのか俺!?

そうだ、昔の人が言っていた。『据えおっぱい食わぬは男の恥』と！

……こうなったら行きますよ！行きますよ！行きますよ！

俺は身体を起こして逆に部長を押し倒す

倒された部長のその目はトロンとしていて、顔もやや赤い。小さく吐息を吐くその様

は、とてもムラつきた

……ごめんなさいサーゼクス様、部長のご両親。あと下で寝ているであろう父さん

母さん。……兵藤一誠、今日俺は大人の階段登っちゃいます……！！

「部——」

ゴスツ!

「——痛っ!」

突然の頭への衝撃に目を覚ました

そこは夜中ではなく、まだ明るい昼間。場所は俺の自室のベッドではなく、いつもの
教室

俺の目の前の人物は、艶かしく顔を赤らめた部長ではなく、苛立ちで青筋を立てた教
師だった

あ、やっぱり夢だったのですね・・・

周りのクラスメート等は俺の様子を見てクスクスと笑っている

「兵藤、私の授業で眠るとはいい度胸だ・・・」

目の前では薄い頭が特徴的な教師がプルプルと震えていた

なんてことだ、よりによってこの人か。この教師は何かと厳しい頑固おやじと学園では有名で、もし授業中に寝ようものなら――

「目が覚めるまで廊下に立っっている！」

ソイツは廊下に立たされるのだ。今の俺のように・・・

寒い。窓から吹き込む風が身にしみて眠気も覚めてきた

とても惜しい夢だった。・・・まあ、夢は夢だよな？

「そもそも、部長とあんな関係になれるわけないよなあ・・・」

俺の深いため息が秋空に淀んでいった

.....

さて、俺が悪魔に転生して大体半年が経ち、悪魔の生活にも時折驚くこともあるけど着々となじんでいると思う

ちよつと前に転校してきた、かつての俺の幼馴染で、部長の戦車のゼノヴィアの元仲間だった紫藤イリナも、随分とグレモリー眷属に慣れていた。今じゃあアーシアとゼノ

ヴィアの三人でいるところをよく見る。仲が良くて何よりだ

新たに加わったロスヴァイセさんも今や一教師として日本の生活にだいぶ慣れてきてるそうだ。最近は一〇〇円ショップに毎日のように通つてるとか・・・

気がつけばこの学園には悪魔、墮天使、(自称)天使、ドラゴン、吸血鬼、北欧の戦乙女と、色んな物がごった返しになっている。これも二天龍の宿命って奴なのだろうか？
これから先もこの街に悪魔や墮天使、天使等、人ではない方達がどんどん集まつてくるだろう

・・・そういえばここ最近になって、イリナとはまた別の、教会の人がこの街にやってきた

神父がいなくなつて廃屋の状態で放置したままだった街唯一の教会に

その新しい神父がいるらしい

アーシアを助けた時の、フリードやレイナーレと戦つた時のあの教会だ。そう言えばコカビエルの時も一度あそこで戦つたと木場から聞いたな

その教会の事をクラスメイトから聞いた翌日アーシアと一緒に見に行つたけど、いつ崩れ落ちてもおかしくなかった程のボロボロの廃屋は立て直したばかりの綺麗な教会に変貌していた

そのときに神父さんを見たけど、ブロンドヘアに知的な眼鏡のイケメンだった。歳は

おそらく20ちよつとつて感じの若い男。あんな人が神父なら、すぐにでも人が集まるだろう。特に女性・・・ちくしょう

後で部室でそんな話をしたらイリナの知り合いだとか。後、『もしかして私つてあまり期待されてない!』とイリナが騒いでいたな

死ぬかもしれない時が何度もあつたけど、騒がしくて笑顔であふれる今がとても楽しいと思つている

そんな日常がいつまでも続けばと思つていた。だが、また新たな危機が迫っていることを、この時の俺は想いにもよらなかつた・・・

第一話・・・搜索

最近近辺の街で大勢の人が行方不明になっているとニュースで騒がれていた

証拠とか痕跡が何もなく、人がふと消えたそうだ

この街でも既に何名か行方不明になっている人がいると警察に依頼が入っている

ウチの学園の生徒も既に何人か行方知れずになったらしく、会長さんや匙等生徒会が集団登下校を促していた

以前にも英雄派の連中が神器使い達を引き抜いていたからそれではないかと、アザゼル先生に聞いた

『そんな一都市に神器使いが集まっているわけないだろ。もしそんな場所があるなら俺が真っ先に捕まえてるだろうがよ?』とさも当たり前な顔をなさっていた

『まあ、リアス・グレモリーの管轄内の人間をさらうことで、俺達を誘い出しているという考えも悪くはない、悪党の定番だ。だが、そのやり方はかなり回りくどいな。ぶっちゃけ今までの英雄派らしくない』とも言っていた

となると、英雄派とは別件でこのあたりの人はさらわれているのが高いことになる。修学旅行前にも英雄派の神器使い達が襲ってきて大変だったというのに、この街もや

けに物騒になってきたものだ

気をつけてと部長に言われながらも、一般人の事件ならば関わることはないと思っていた。思っていたのだが、その夜にはこの事件に首を突っ込むことになるのだった

「俺の娘を、どうか探してください・・・！」

人が寝静まる夜、俺はいつものように自転車で依頼者の元へ飛ばす。たどり着いたのは街灯が一つポツンと照らされた小さな空き地だった。そこに一人、40代前半ほどのおっさんが立っていた。話しかけづらい雰囲気だったが意を決して話しかけたら、そう言われた

「あの、そういうのは警察に頼んだ方が良いんじゃないですか？」

「警察にはとつくに届けたさ。だがいつまで経ってもあいつらは『まだ捜査中です』と言って濁すばかり・・・」

俺はちらりとおっさんを見直す。そこら中皺や汚れでボロボロの衣服に、ボサボサの頭、目は深い隈、鼻をつんざく体臭・・・何日もの間、一睡もしないで娘を探してい

たというのが良く分かる有様だった

「妻が早死にしちまって・・・男手ひとつで育てた大事な娘なんだ」

そういうおっさんの顔には涙がこぼれていた

「・・・全財産でも、俺の命でもいい！だからどうか、どうか娘を・・・！」

おっさんは地面に膝をつく、頭にこすりつけるように頭を下げる——いわゆる土下座の体勢をとりだした

「あ、頭をあげてください」「どうか、お願いします・・・」

止めてもおっさんは頭をずっと下げていた、ずっと

・・・リアス部長がライザーに婚約されそうになった時はパーティー会場に乗り込んだ。自分の腕一本を犠牲にライザーを殴り飛ばした。アーシアがディオドラの野郎にさらわれた時はとても心配した。死んだと言われた時は安心して覇龍になったそうだが

それほどまでに俺は部長が好きだ。アーシアも傍で守ってやりたい。でも、それは朱乃さんでも、子猫ちゃんでも、ゼノヴィア、イリナ、ロスヴァイセさんでも、木場やギヤスパーだろうと、俺は同じことをすると思う。同じように俺は皆が大切なんだ

これはたぶんこのおっさんのとは違うと思うけれど、俺の大切な人たちが突然いなくなったら、俺もこのおっさんみたいに、一睡もできないほど心配するし、命を掛けてでも助けられると思う

そんなことを考えていたら、俺は答えが出ていた

「・・・契約、承りました。俺が娘さんを必ず見つけます。対価はその人を連れ戻したその時に、改めて受け取りに行きますので」

「あ、ありがとう！」

もうすぐサイラオーグさんとの試合もあるし、勝手にこんな依頼受けるのはマズイだろうけど、俺はおっさんの頼みを断ろうとは思えなかった

依頼を承った俺に、おっさんは深々と頭を下げただだ『ありがとう』と言い続けた

.....

「娘さんの名前は・・・こぎくちゃん、か」

翌日の放課後、ソファアに座り込んで昨夜のおっさんから渡された娘さんの写真を見ていた

写真には肩まで伸びた黒髪に惚げそうなイメージの優しい女の子が映っていた。俺の一つ年下と聞いたから、今は高校一年生だろう。あのおっさんからこんな可愛い子が生まれるとは・・・

ふと、俺は写真のある部分に目が移る

「……」ゴクリ

生唾を飲み込んで写真の女の子を見る

デカい。推定92（元浜直伝3サイズスカウター参照）。朱乃さん、部長、ロスヴァイセさんに次いでかなりのサイズののおっぱい様だ

「……？」ストーン

つつい向かいのソファアに座っていた小猫ちゃんの方を見ていた。彼女はいつものようにお気に入りのお菓子を黙々と食べていた

決して見比べたかったわけじゃなくて、偶々見ちゃったんです

……やっぱりデカいな、この子こぎくちゃん

「……何を見てにやついているのですか？」

俺の視線に気づいた小猫ちゃんが俺の方を見返した

その時俺はとっさに写真を後ろに隠した

探し人の写真だと普通に言えばよかったのだが、本能的に見せてはマズイと思ってしまった、俺のバカ

「……なぜ隠すんですか？」

「いや、その、なんていうかこれは・・・その・・・」

ガチャ

「失礼します」「む？ イッセーに子猫だけか」「ふたりだけでなにをしてたの？」

部屋にやってきたのはアーシア、ゼノヴィアにイリナ、お馴染みの教会トリオだ

「いえ、イッセー先輩が隠し事をしてるそうで」

「何かしら。隠されるほど気になるわ！」

「いや、別にそんな大したものじゃ・・・」

「なら見せても問題はないのではないか？」

ゼノヴィアの言うことは正論だ。だが、『しろと言われると、より一層したくなくなると』というのが人間の心情であり悪い癖なわけで・・・つまりここまで来ると意地でも見せたくない、というのが俺の応えです

「・・・先輩はそれを見て、いやらしい顔をしていました」

そんな顔してたの俺!? エロエロでごめんなさい!

「もしかしてまたエツチな物ですか？」

アーシアさん、またってどういうことですか？ 思われても仕方ないですけど

「もしそうならイッセーの性癖を知るために確認する必要があるな。家にあつた書物関連以外にも別の好みがあるかもしれない」

うんちよつと待つて。今聞き捨てならない言葉が聞こえたんだけど!?

え、何? 書物つて、もしや俺の秘蔵ツ子達の事か!?

部長やアーシアが俺の家で一緒に暮らすようになってから、朱乃さんゼノヴィア小猫ちゃんと、今ではグレモリー眷属の女の子たちと一緒に住んでいる。松田元浜とかがきいたら即自殺するだろうな。・・・さて、一緒に暮らしてる上での問題は色々あるけどやはり一番悩んだのは俺の秘蔵のエロ本たちだ

決して彼女らに興味がないわけではない。でもそれとは別に読みたいんです! だって青春と性欲真つ盛りの男子高校生だもん!

最初にアーシアが来た頃は見つからない程度にベッドの奥とかに隠していたが、部長が住むようになってからは隠そうとしても部長にはお見通しだったりで、隠すのに苦労したっけ……。和平会談後には家を改築して、朱乃さんやゼノヴィアも住むことになった。その頃にはそこら辺に隠しても直ぐにバレてしまっていた。そして、今や小猫ちゃんにイリナ、ロスヴァイセさんと、もの凄く大所帯になっていて、読む時間すら危ぶまれるほどになった

つまるところ現在は彼女らに絶対に見つからないよう、それはもう金と時間を掛けて、家のあらゆる場所に隠したのだ

・・・だというのに、それがもう見つかったというのか・・・!?

「床下だとか、天井裏など、物を隠すにはまだまだ甘すぎるぞイツセー。壁に埋め込むという発想は悪くはなかったがな」

「私は止めようと言ったんだけどね、ゼノヴィアったら一度決めたら止まらないから・・・」

「何を言っている。『これだけ探してなぜ幼馴染物が無いのよ!』と躍起になってたのはイリナの方ではないか」

「た、確かに『私そういう対象で見られてないの!?!』って思ってた意地でも見つけようと思し回ったけど、決してやましい気持ちでしたわけじゃないの!・・・いやでも、したことは事実。ああ、主よ! 邪な行爲をした私をお許してください!」

なんか隠し方を指摘されたり、己を戒めて祈っているが、とどのつまり俺の子供たちはとつくに彼女らに見つかってしまったというのは理解した

なんてことだ。この間のエロゲの時といい、俺の性癖がどんどんさらされ続けている・・・

俺が膝をついているとアーシアが何かを発見した。一枚の写真だった・・・ってしまつた!

「なんででしょう・・・」

「写真みたいだね」

「・・・美少女です」

「うむ。可愛らしい女の子が映っているな」

ズイツと横からイリナとゼノヴィアに子猫ちゃんまで覗きこむ

「ねえイツセー君、この女の子とどういいう関係なのかな？」

「いや、別にそんな関係なんてないけど・・・」

「関係ないのならば彼女の写真を隠すような真似をしたのか、そこが引つ掛かるのだから？」

「そ、それは・・・」

「私たちに言えないような深い関係ってことなの!？」

「そんな!？イツセーさんはこの女の人とどういった深い関係なんですか!？」

「だからそんなんじゃないかって・・・」

「[[「イツセー(さん)(先輩)」]]」

美少女四名がもの凄い剣幕で詰め寄ってきたので、俺は事情を告げることしかできなかった

「——っということなんだ」

「行方不明の女の子・・・最近このあたりで起きてる事件ですか」

「この間の依頼人が友人が一人いなくなつたと言っていたな」

「明らかに怪しいわね。はぐれ悪魔かはたまた禍の団か・・・」

「そのお父さんも早く安心させてあげたいです」

とりあえず分かつていた দিয়ে何よりです

「それにしても・・・確かにイツセーの好きそうな女の子だな」

ゼノヴィアが改めてこぎくちやんの写真を見直す。それは紛れもなく胸の部分を見ていた

胸が大きいからって好みというわけではありませんよ!?!・・・大きなおっぱいは好きだけどね!

「そんな、年下に負けた・・・」

イリナは膝をついていた。その横でアーシアは胸に手を当てて、ある決意表明をした

「イツセーさん好みの大きさになるためにも、私頑張ります!」

「手伝おう。私はアーシアの友達だからな」

「当然私も手伝うわよ」

「ありがとうございます。ゼノヴィアさん、イリナさん」

三人の仲が良くて喜ばしい事だ。俺の前でそういった話をするのは置いてください……

「……それで、私の胸と見比べていたのですね？」

一方横では小猫ちゃんがジト目で俺の顔を見ていた

「だ、大丈夫だよ小猫ちゃん！お姉さんの黒歌もだいぶご立派なお胸でしたし。いつか小猫ちゃんだつてなるよ」

……たぶん

「そ、それに！小さいには小さいなりにいいところもあるよ！ほら、有名な人もこう言つてたし。『貧乳はステータスだ！希少価値d——グエツ！』」

ドスツ！と、小猫ちゃんの手刀が俺の喉元を的確に突いてきた

小猫様！それマジで死んじゃうから!?

俺は喉を押さえながらソファから転げ落ちた

「私だつていつかは……」

小猫ちゃんは何かいつてたと思うけど今はのどの痛みに悶えていて聞くどころではなかった

.....

HERO

「どうしたんだ曹操？」

「いや、少し右眼が疼いただけだ」

「それは急ごしらえで着けたものだから気をつけてくれよ？間違ひなく成功してるだろうけど、絶対の保証はできないからね」

「気をつけておこう。・・・それで、ハーデスとの交渉はどうなった？」

「ああ。なんとか龍ドラゴン喰コン者の召喚許可にこぎつけることができたよ。随分と細かい条件付きだったけど。しかも代わりとでもいわんばかりの死神まで寄越してきた」

「ハーデスも随分と慎重なようだな。だが、サマエルさえあれば十分心強い。あれならばオーフィスを殺すことも可能のはず・・・フフフ」

「そんなに楽しみか？」

「ああ、彼らと再び相まみえるのが待ち遠しいよ。作戦は近いうちに決行しようと思う」
「分かった・・・と、言いたいところだが・・・どうやら彼らが動き出したようだ」

「!・・・そうか、遂に・・・、居場所の特定はできるか？」

「今も探してるが、中々てこずらせてくれる。そもそも彼等の力は神器の物とは別だ」

「・・・人間でありながら人とは一線を隔した存在。悪魔やドラゴンよりも厄介だよ・・・
本当に」

第二話・・・男の娘

どうも、兵藤一誠です

あの後、依頼人のおっさんの事を部長に話した

「サイラオーグとのレーティングゲームの件もあるし、せめてそういった話は先に私に話してほしかったわね」

「スミマセン」

部長は若干呆れたような顔をしていた。申し訳ありません

「ホント、イツセーらしいわね。・・・いいわ。ただし、自分で受けた依頼である以上、自分で責任を取りなさい」

「——はいっ！」

責任・・・重い言葉だな。考えたくないけど・・・もし、娘さんが見つからなかったら、俺はおっさんになんと言えれば良いだろうか？・・・いや、やめよう。とにかく今は探すことに専念だ

といつても、手掛かりがない今、街を風潰しに探すしかない・・・うん。これは普段の依頼なんかよりも辛いな

「リアスお姉様、私イツセーさんと一緒にこぎくさんを探します!」

なんて考えているとアーシアが手伝うと言ってくれた

「先程も言ったように、私も手伝うぞ」

「もちろん私も手伝うわよ。迷える子羊を救うのはミカエル様のAの役目だもの!」

ゼノヴィア、イリナも張り切った様子だ

「僕も捜索に協力させてもらうよ」

木場・・・ありがたいが顔が近い

「・・・私も一緒に探します」

「ぼ、僕もイツセー先輩のお手伝いをします!」

小猫ちゃん、ギヤスパーまで・・・

「あらあら。では私は、お得意様の中にそういうのに詳しい方がいるから、そういった情

報を聞いてみますわね、部長?」

「そうね。行方不明者の話は、前々から私と朱乃も調べてたし、皆イツセーを助けたいみ

たいだしね」

「部長、皆・・・」

「では私は行方知れずになった生徒の親御さんの方から、話を聞いてみましょう」

と、ロスヴァイセさんも協力してくれるみたいだ

「ククク、すっかり中心人物だなイツセー」

アザゼル先生はいつものようにソファーにどっかりと座って笑っていた

「俺達の方でも以前から、英雄派に備えてに、不穏な動きはないかこの街を見張らせている。もしその嬢ちゃんを見かけた奴がいたら、知らせてやるよ」

なんだかんだで先生も手伝ってくれるようだ

皆優しいな、ホント！こうなれば何が何でも見つけなきゃな！待ってろよおっさん！

.....

とまあグレモリー眷属総出で行方不明者の捜査が始まったわけで

部長と朱乃さんは情報屋へ話しを聞きにとどこかへ跳んでいき、ロスヴァイセさんはアザゼルを引きずりながら行方不明の生徒の家へ、ギヤスパーはネットワークで調べるとかで家に戻り、残った俺、アーシア、ゼノヴィア、イリナ、木場、小猫ちゃんの6人は二手に分かれて街の中を探し回ることにした

いつもと変わらない街並みを俺はキョロキョロと見渡す。すると・・・

「御譲さん、暇ならちよつと俺達と遊びに行かない？」

「ながく引きとめたりはしないからさ」

「あの、その・・・」

俺達の2, 3ほど歳上の若い男三人が桃髪の子を囲って話しかけていた。こんな真昼間からナンパかよ。顔は良く見えないが、可愛い女の子の方はオロオロして困った様子に見えた

そんな様子が見てられなくて、俺は助けに行くことにした

「おい、アンタら何やってんだ？」

「あん？何か用？」

「俺達忙しいんだけど・・・」

俺が話しかけた途端急にガラが悪くなった。まあナンパ中に話しかけられたら不機嫌になるのも分からなくはない。途中で話しかけられるどころか、ナンパ出来たためしもないけど

「なあそこの彼女たち、こんなダサイ男より、俺達と一緒に遊ばないかい？」

男の一人が俺の後ろにいたアーシアとゼノヴィアに声を掛ける

俺はアーシア等に近寄る男との間に割り込む

「おい、二人には手を出させねえぞ！」

アーシア達を連れてくたって？そんなのさせるかよ！

「イツセーさん・・・」

「私も手伝おう、イツセー」

「げ！あのときの・・・」

アーシアの後ろにいたゼノヴィアがこつちの方へ顔を向けた途端、男どもは蒼い顔をしだした。もしかして知り合いだった？

「む？お前達は聖地に行った時の・・・」

「「「げ、げめんなさいでしたー！！」」」

男たちは声をそろえてその場を走り去っていった

・・・とりあえず大事にならなくてよかったけど、あの人たちに何をしたんだよゼノヴィア

「お怪我はありませんか？」

「あ、ありがとうございますう・・・」

桃髪の子は深々と頭を下げて、俺達に感謝の言葉を告げる

その子は顔をあげて、遂にその顔を拝んだ。ほんわかとした可愛らしい美少女！

「助けてもらってありがとうございますう。僕ああいった方とおはなしするのが苦手
で・・・」

．．．ん？僕？

「．．．なあ、こんなこと聞くのは失礼かもだけど．．．もしかして男？」

その子はきよとんと首をかしげて答えた

「ほえ？僕は真正正銘男ですよ？」

あゝマジでか。コイツもギヤスパーと同じ女装野郎だったのかよ

しかもこいつもギヤスパー同様、女装が似合いすぎて女の子に見えて仕方がない

「ギヤスパーさんと同じ方でしようか？」

「男とは到底思えない格好だな」

「えっと．．．僕の名前はイブ＝真久蘭といいます」

「俺は兵藤一誠。イツセーって呼んでくれ」

「アーシア・アルジェントと言います」

「ゼノヴィアだ」

「本当に助かりました。実はいつもああいった人たちに良く声を掛けられるんです」

「女々しい格好をしているからであろう」「女の子の格好をしているからだろ」

「!?」ガーン

俺とゼノヴィアのツツコむと、イブは分かりやすいぐらいに驚愕し、今度は表情が暗くなった

「ううう・・・ぼ、僕だつて好きで女の子の格好をしてるわけじゃないんですう」
「はあ？嫌々で女装するつて？」

自ら望んで女装する奴なら心当たりがあるけど、とても似合うダンボール吸血鬼とか、人なのはどう見ても人と思えない漢女な常連さんとか・・・

「ジューダスですう・・・。ジューダスが勝手に僕を女の子と間違えて・・・以来自分が悪い癖に僕に女の人の格好をさせようとするです・・・人でなしですう・・・僕がいやがることばかりするですう・・・」

酷く怯えた様子でイブは答えた

男に無理やり女装させるとは、とんだ男の娘好きの変態もいるもんだな。森沢さん？
はて一体誰だっけー（棒）

怯えるイブの手をそつとアーシアは手に取る

「安心ください。主はあなたを何時までも見守っておりますよ」

「アーシアさん・・・」

「ふむ。そのような変態がいるのか。私が直接出向いて悔い改めさせてやろう」

お、落ち着けゼノヴィア！一般人相手に殴ったら相手死んじまうから！

「・・・でも、誰にもジューダスをとつちめられないです・・・そう、誰にも・・・」ボソツ

イブが何かぼそりと言っていたが、よく聞き取れなかった

「コホン。．．まあ、相手もそうだけだよ、お前にも問題があるぜ？そういうのは自分の意志ではつきりと言わなきゃ駄目だ」

「自分の、意志．．．」

「そう！男ならビシツ！とな」

「．．．はい！僕、頑張ります！」

「ヨシ！そのいきだ。まあもしそれでも駄目だったら——」

俺はポケットから一枚のチラシをイブに渡した

「あなたの願い、叶えます．．．？」

「イツセー、それは悪魔のチラシでは？」

そう、悪魔家業でお馴染みだった簡易魔方陣付きのチラシだ。こういうところからお得意さんをつくるのだ！真面目だな、俺．．．

「怪しいと思うだろうけど、案外叶えてくれるかもしれないぜ？」

「クスツ．．．ありがとうございます」

オロオロしていたイブは可愛らしい笑顔を見せる。．．．男だよな？

「じゃあな、イブ！」

「さようなら」

「気をつけるのだぞ?」

「あ、はいですう!」

イブに別れを告げて俺は再び搜索を再開した

「イツセーさん、カッコいい人でした・・・。僕もいつか、ああいう男気のある人になりたいです!そのためにも、まずは男らしい格好を・・・」

《イブ、次のバイト先メイド喫茶にしようぜ?当然メイド服でだ》

「だから女の子の格好はやめてくださいですう〜！」

第三話・・・神父

平日の放課後、辛い授業も終わってクラスメイト達が帰って行く。俺もいつものように部室に向かうため鞆を手を取る

「俺たちも部長たちのところに行くのでしょうか」

「ごめんなさいイツセーさん。私少し寄りたい所があるので・・・」

「ああ、分かった」

申し訳なさそうに頭を下げるアーシア。ほんと可愛らしい

「私も同行してよいか、アーシア？」

「あ、はい。全然大丈夫です」

「つてことは部室に行くのは俺とイリナか」

「あ、私も用事あるから」

「イリナも？」

「この間来たつていう神父さんとちよつとお話ね」

明るい笑顔でイリナは答えた

神父つていうとあのメガネのイケメンさんか

「そういえば、この間この街に来た神父はイリナの知り合いと聞いたな」

「実はそうなの。私がイツセー君とお別れしてこの街からイギリスへ引越した時、お父さんが教会で働いてる間、幼い私は教会の孤児院に預けられていたの。その時に出会ったのが、孤児院で一番の年長者だった聖ひじり空人さんそらひと。面倒見が良くて優しくして……そう、皆のお兄さんみたいな人だったな……私にとつても」

「それだけかなー?」

三人の話に割って入ったのは、アーシアにエロい事を教えているけしからん眼鏡ッ娘、桐生だ。帰ったんじやなかったのかよ

「それはどういう意味かな桐生さん?」

「いやいや、もしかしてその神父さんのこと実は好きだったんじやないのかな? つて」

「うええ!」

突然の言葉にイリナは顔を真っ赤にして慌てだす

「あれあれ? もしかして凶星?」

「あ、いや、確かに空人さんはかっこよくて優しくて頼りになる人だったけど、決して好きという感情かどうかって言うのは……」

必死に言い訳をするイリナの様子は、その表情を見なくても分かるほどにとても動揺していた

それを見てキラーンと桐生の眼鏡が輝く

「おやおやく？これは兵藤一誠ハーレムの危機かな？」

と、面白そうと顔に描いてるほど分かりやすい表情で離れた席にいた俺の方を見る俺がいつハーレムを作ったんだ、いつ。まあでもハーレム作るのは俺の目標の一つですけども！

「そそそ、それじゃあ私はもう行くから！また後でね！」

イリナはサツと鞆を持って教室を出て行ってしまった

その後、アーシアも学校を出ていったので、俺は一人で部室に向かった

.....

街の外れにある大きな教会。私、紫藤イリナは久方ぶりの知人に会いに来た

教会の前には一人の男性がいた。五年近く経つても、あまり変わらなかつたようだ

「久しぶりだね、イリナちゃん」

「お久しぶりです、空人さん」

聖空人、九つ年上の優しい神父さん。彼に招かれて私は新しい教会の中に入った

真新しいパイプオルガン、曇りなき輝かしいステンドグラス、真っ白に美しい聖マリ

ア像。新築そのものって感じね

ここが以前コカビエルと一戦交えた、ボロボロの教会だったとは到底思えないわ

空人さんの後ろについていくと、小部屋へと案内された。談話室みたいな感じかな？
ソファに腰を掛けるよう促され、私は席に着く

「空人さん、お変わりがないようで・・・」

「そういうイリナちゃんも本当は変わっちゃたよ。最初に来た頃なんて院の男の子たちよりもやんちゃだったっけ」

「今更昔の事掘り返さなくてもいいじゃないですか！・・・まあ、私だってこんな魅力的な女性になりましたけど？」

「そうだね。綺麗になったよ」

空人さんはニコリと笑った。今も変わっていないあの優しい笑顔を

綺麗、か・・・

改めて、私は随分と変わったと思う。院に預けられたばかりの頃は、男の子達とヒーローごっこをするようなやんちゃだったっけ。そのせいで周りの女の事はく上手く馴染めなかつたけど、あの子のおかげで・・・

「・・・そういえば、空葉ちゃんは元気ですか？」

そう、空人さんには実の妹がいる。聖空葉ちゃん。私の二つ下の元気な女の子。孤児

院での最初のお友達で、あの頃は私も妹のように可愛がっていたものだ

よく考えてみれば、エクソシストとして教会に属して、ゼノヴィアとパートナーを組んで、聖剣の因子をもらってエクスカリバー使いになって・・・教会で働くようになってからあまりに忙しくて、空人さんや孤児院の人達とは全くと言って良いほど関わることはなくなつたのだ。今頃、皆どうしてるのかな・・・

「妹は・・・亡くなつた」

「え・・・!?!」

衝撃的だった。まさか空葉ちゃんが・・・

「・・・流行り病だった。だが、発見が遅くて・・・」

暗い表情で空人さんはうつむいてしまった。空葉ちゃんの事を悔んでやまないのだから

ミカエル様のAでも、私には亡くなつた空葉ちゃんを救うことも、天に導くこともできない。けど、祈ることならできる!

「きつと空葉ちゃんも天の国に導かれて、報われてますよ。彼の御霊が天の国で安らかなる事を・・・」

私は誠心誠意、深く祈つた。・・・祈りは届いてますよね、ミカエル様?

「天の国、か・・・。なあイリナちゃん。・・・人は死んだら、どこに行くんだろうね?」

「え？それは天の国じゃないでしょうか？聖イエス様がそうおっしゃってましたし」

すると突然、空人さんの雰囲気が変わった。暗いというより、重いというか、どこか黒い……

「私は思うんだ。天の国に行けば本当に幸せなのかと……」

「空人さん……」

「……いやすまない。久しぶりに会ったのにこんな暗い話をするなんて」

「いえ、振ったのは私のほうですし」

空人さんは再び明るい表情に戻ると雑談に入った。普段の彼と同じに見える。でも、先ほどの様子を見て理解した。無理をしてるって……。それもそうだよ、実の妹が死んじゃったんだもん。悲しくないわけない。でも空人さんは同じように優しく笑っていた。きつと私を励ますために……

そう思うと、空人さんの顔が見れなくなってきた

ふと、桐生さんの言葉を思い出す

『好きだったんじゃないのかな？』

「——ッ！」

顔が熱い。今私の顔はかなり赤いだろう

いやいや違う！……と思う。これは、そう！恋愛ではなく友愛とか敬意！それなの

よ！そもそも私には既にイツセー君と言う心に決めた人がいるんだから、それじゃあ浮気になってしまふ！それは駄目よ紫藤イリナ！ミカエル様のAなのにそんな墮天するような真似は・・・いやでも、以前から墮天しそうになってること多くないかな私。この間もイツセー君の隠してたDVDを――

なんてことが頭で渦巻いていると、空人さんがスツと立ちあがった

「・・・すまないけど、私はこれから用事があるので出かけなくては」

「え、あ、じゃあ私も帰ります！」

いくら知り合いとはいえ、他人の教会に一人と言うのはいささか居心地が悪い。というか、今の状態でここに居座れない。それに、そろそろ帰らないと皆が心配するだろう

私も席を立ち、部屋の外へ向かう。その時、何か金属がぶつかるような音がした

ふと下を見ると、足元近くに何か落ちていた。あれは・・・十字架？

しゃがみこんだまま私はそれを拾い上げた。女性が十字架のような態勢を取った物だ。十字架には首にかけたり腕に巻くための鎖がつながっていた

こんな十字架、今まで見たことがない。これは一体どこの物なの・・・

「イリナちゃん？」

「――！な、なに空人さん！」

「いや。急にしゃがんだまま動かないから・・・大丈夫かい？」

「あああ何でもないです。大丈夫ですから！」

私はすぐに立ち上がりそのまま教会を後にして家に帰った

アーシアやゼノヴィア、オカルト研究部女子部員皆が住んでいるイツセイ君の家へ
拾った十字架をポケットに突っ込んだまま

第四話・・・予期

「搜索を始めて早一週間。未だにこぎくちゃんは見つからない。あれだけ言ったのにまだ見つけることができない自分に歯がゆく思うぜ

とはいえ、悪魔であると同時に学生の身である俺たちは、昼間の間の搜索は使い魔に頼み、学校へ通っている

そう、俺は他人よりちよつとおっぱいが大好きな、健全な普通の男子高校生・・・の
はず。うん

さて、昼休みに俺は、クラスメートであるアーシア、ゼノヴィア、イリナの教会三人組とこれまでの搜索について話し合いながら、廊下を歩いていた

「しかし、周辺の町の隅々まで探したというのに、手掛かりの一つも見つからないとは・・・」

「これは明らかにただの人間にできる事じゃないわね」

「ということはこちら側の、か・・・」

「はぐれ悪魔さんとかでしょうか？」

見知らぬはぐれ悪魔にもさん付けするアーシア

「ありえなくはない。だが、我々の活躍を知らぬ者は早々居ないだろう」

確かに。コカビエルの暴走、旧魔王派の襲撃、悪神ロキとの戦闘、京都での英雄派の謀略。たった半年の間で数多くの大事件を乗り越えたりアス・グレモリーとその眷属達。その成果は全勢力に知られているはず・・・

「だから、我々の事を知って尚ここに来る者は、余程の愚者か、自信のある強者のどちらかだろう」

前者であればなんら問題はない。けどもし後者だったら・・・

ヴァーリや曹操、サイラオーグさん。当然俺なんかよりも上にいるであろう強者達か・・・

ふと考えていると前方に段ボールの山が視界に入った。それはこっちに近づいており、進む先にはイリナが立っている

「――イリナ！前！」

「ふえ？ーキーヤツ！」

ドンガラガツシャアアアンツツ!!

俺達よりも前を歩いて、後ろにいる俺達と話していたイリナは前に気付かず、やってきた人とぶつかってしまった。相手が持っていた段ボールの山が宙を舞い、大きな音を立てて崩れていった

「イリナ！無事か！」

「ごごごごめんなさいですううっ！」

「お、お前は——!？」

「あ！イツセーさんですう！」

「イブう!？」

そこには以前町を歩いていた時に男たちに絡まれていたところを助けた、どう見ても女の子にしか見えない男の娘、イブがお尻から段ボールにハマっていた

「だれかと思えばイブじゃないか」

「ゼノヴィアさんもお久しぶりです。またあえて僕とつても嬉しいですよ」ニパー

柔らかな笑みを浮かべて俺達に挨拶するイブ

「・・・あれ？んー！んー！・・・うわくん！抜けないですよう!!」

段ボールから抜け出せず涙目でジタバタするイブに苦笑いを浮かべた

「なんていうか、ギヤスパー君に似てますね」

アーシアの言葉も分からなくはない。引きこもりではない社交的？なギヤスパーつてのはこんな感じなのかもしれない

とりあえず俺は手を差し伸べてイブを助けてあげた

「えへへ、また助けられちゃいました」

「お前、この学校の生徒だったのか？」

「いえ、実はあの後もお仕事を探していて、でも何処に行っても見つからなくて、途方に暮れていたところを助けてもらいましたあ」

学校に通っている俺達より幼いであろうイブが、仕事を探しているなんていうのも凄
い。っていうか、悪魔や天使墮天使、吸血鬼と、人じゃないもので溢れてるこの学校で
働くというのかよ……

「一体誰が——」

「私です」

「か、会長さん?!」

馴染み深い声に振り向くと、そこにはいつの間にか生徒会長こと支取蒼那がいた。そ
の後ろには副会長の森羅椿姫さんがいつものように付いていた

「公園で段ボールにくるまっつてうずくまっつている彼の姿がかわいらし・いえ、見ていら
れなかったので、私が保護しました」

今妙な口走つてたような気がするけど、気のせいだよな？

「そして、イブさんから事情を聞いた会長が、人員不足だった購買部を勧めたというわけ
です」

「はい。僕、ここの購買部に雇ってもらったんです」

よく見ると口の開いた段ボールの周りにシャーペンやノートといった文房具が転がっていた。さっきの衝突でこぼれたのだろう

「かいちよーさんには感謝の気持ちでいっぱいですう」ニパー

「——っ！・・・なんでしよう、この彷彿とさせる庇護欲は・・・」

「落ち着いてください、会長」

「・・・コホン。そう言えば貴方達、ここ最近頻発する失踪事件を調べているそうですね」
咳を一つついて話題を変えた。というか、こういうのに弱いんですね会長。匙、お前の明るい未来は遠そうだ

「椿姫」

「はい。こちらを・・・」

椿姫さんがどこからか紙束を俺に手渡す。これは、生徒名簿？

「ここ数日になって不登校となっている生徒の詳細です。生徒の安全を守るのも、生徒会の本分です。そして、リアスとともにこの地を管理するものとしても、このような事件は早急に解決すべきことですから」

眼鏡に手を添えて会長は応える

「ありがとうございます」

「リアスを宜しく・・・」

『失礼します』と会長と椿さんはその場を去っていった

「何としてでも、見つけないとな・・・」

「ああ」

「ちよつと!?!」

ズボツと段ボールの山からイリナの顔が飛び出した。首だけ見える状態で、涙目で訴えるイリナに視線が移る

「ああ、すまないイリナ。すっかり忘れていた」

「全くもう・・・最近私の扱い酷いとおもうんだけど・・・」

ゼノヴィアが手を差し伸べてふてくされるイリナを起こした

「・・・おい、何か落としたぞ?」

「え?・・・——っ!」

何が落ちたのか見てみる。シャーペンやノートが散らばっている中、銀色に輝く何かを見つめる。それは十字の形をしたものであった。十字架？

「イリナさん。それは・・・」

「な、何でもないの！なんでも！」

イリナはさつとそれを拾い上げポケットに突っ込んだ

「あ、ほらもうすぐ次の授業が始まるわ！」

「あ、ああ。じゃあなイブ」

「は、はいです・・・」

イブに別れを告げた俺たちは、イリナに背を押されながら教室へと戻った

《オイ。アレが何だか気付いたよなあ、イブ？》

「・・・」

《ククク・・・祈る準備をしとくんだなあ？》

「……」

……

放課後

「ゴメン！急用を思い出したから先帰ってて！」

「おい、イリナ！」

これから部活だと言うのに、ゼノヴィアの制止も振り切って、イリナは教室を飛び出してしまった

「イリナは私が追おう。イツセーとアーシアは部室に行つて部長に伝えて欲しい」

「ああ。分かった」

鞆を一誠へと投げ渡し、ゼノヴィアはイリナを追いかけていく

一先ずゼノヴィアに任せて一誠とアーシアは部室へと駆け出した

「そう、イリナが……教会の件もあるし、少し心配ね」

部室にて事情を説明すると部長はそう告げた。協会の件？

「え？あの教会がどうかしたんですか？」

「その教会のことですけど、天界や教会本部から要請されたものではないらしいですわ」
それって不正規に建てられたってことですか？

「ああも堂々と出てきたものだったから、気付かなかったわ」

あまりの迂闊さに齒噛みする部長。まあ確かに、お手製の菓子まで振舞われ、爽やかに挨拶してきた神父を怪しいとは俺も思わなかつた

「皆さん、ただいま戻りました」

「おうお前ら、面白い情報を手に入れたぜ？」

とここでロスヴァイセさんとアザゼル先生の教師組が部室に入ってきた

「何か収穫はあったのかしら？」

「はい。行方不明の生徒さんの自宅を調べてみましたら、こんな物を・・・」

ロスヴァイセさんが布越しで掴んでみせたのは十字架だった

これってさつきイリナが落としたものに似ている

「まだ詳しく調べてねえが、コイツの製法からして、そんじよそこらの一般人が手にできる代物じゃねえ」

それってつまり特殊な製法ってことか？

「それとだ。町中に仕掛けておいたカメラが、行方不明になった一般人達を捉えていた。ここ一ヶ月にいなくなつた奴らは皆、どうも直前に同じ場所に向かつて行つたようだ」
それってまさか・・・

「ああ」

「この町にできた新しい教会だ」

.....

「イリナを見失ってしまった。ここは・・・教会の近くか」

イリナを追っていたはずなのだが彼女を見失い、いつの間にか教会の敷地内に迷い込んでしまったようだ

「・・・ん？あれは聖神父」

レンガ造りのある建物――形から聖堂だろう――の裏手で怪しい動きをする彼を見かけた私は、近くの茂みに身を潜めその様子を伺った

なぜこのような人気のない場所に彼は来たのだろうか・・・

聖堂の壁に触れて何かを探っているかに見える。すると、ゴゴゴゴと、壁の一部が動き出した

重々しい壁の奥へ聖神父が入っていくと、壁は再び閉じていった。閉じ切った壁に耳を当てるゼノヴィアア。カッーン、カッーンと足音を拾う。足音は段々と小さくなり聞こえなくなったのを確認するとゼノヴィアアは辺りの壁を手探りで調べだした

「確かこの辺り……!」

スウ、と指先に触れていたレンガの一つが奥に沈んだ

ゴゴゴゴ

すると、目の前の閉ざされた壁が再び開かれた。成る程、そういう仕掛けだったのか壁の向こうは下に向かう階段だった。光の届かない空間だが所々の壁際に置かれた燭台の火が仄暗くも照らしていた

「隠し扉に地下空間……一体何を隠しているのだ?」

音を立てぬようゆっくりと、階段を降りた

やがて階段は終わり、平坦な地下階層に着いた。降りた先にはただ一直線に道が続いているようだ

『……シイ……ウウ……』

道の奥深くから何かが微かに聞こえる

『……ウウ……アア』

これは——声だ。何か苦しんでいるような、呻き声の様なものが極僅かであるが聞

こえた

まさか、誰か監禁されているのか？

いざという時に備え細心の注意を払って声のする部屋へと向かった

・・・正直なところ、最初から間違いだった。ここに自分一人で中に入らず、リアス部長達に連絡するべきだった

声のする所——半開きの扉からは小さな光が漏れている。私は恐る恐る扉の隙間から覗いて——ソレを見つけてしまった

これはなんだ？いや、なぜこうなった？

目前に存在する異形に私は目が離せず、声も出なかった。私の意識はソレだけに奪われていた

故に私の背後に誰かが立っていることに気付けなかった

「見てしまったんだね？」